



2



3



4



5



6



1

写真1 備前焼 甕

- 1 表面伊部手 個人蔵
- 2 元龜2年(1571)銘 岡山県立博物館蔵
- 3 文禄3年(1594)銘 岡山県立博物館蔵
- 4 慶長12年(1607)銘 岡山県立博物館蔵
- 5 慶長18年(1613)銘 岡山県立博物館蔵
- 6 元和5年(1619)銘 岡山県立博物館蔵

元龜
2年

1571



文祿
3年

1594



慶長
12年

1607



慶長
18年

1613



表面伊部手

元和
5年

1619



時代が新しくなるにともない、
頸部から胴部への張りが小さくなり（黒縦線）、
胴部最大径の位置が頸部に近づく（白横線）。

写真2 備前焼 甕の変遷と表面が伊部手になった甕



写真3 美濃焼 美濃伊賀花入 個人蔵

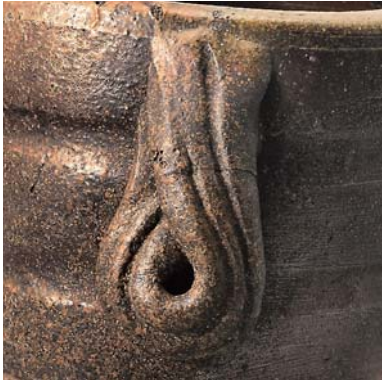


写真4 (右) 備前焼 水指 岡山シティミュージアム蔵 (木村コレクション)
(左上) 耳拡大 (左下) 写真3美濃伊賀花入 耳拡大



写真5 備前焼 木葉形鉢 岡山シティミュージアム蔵 (木村コレクション)

「伊部手」の出現

重根 弘和

はじめに

「伊部手」と呼ばれる備前焼がある。光沢を帯びた黒色や深い紫色になった茶道具などで、江戸時代以降に流行した。伊部手は黒く発色する土を水で溶かし、それを表面に塗る。塗土そのものは、甕などの水漏れを防ぐため、室町時代にはすでに行われていたとされる（桂一九七三）。ただし、桂によるとこうした甕は、「初期伊部手」に含まない。初期伊部手は、水指や花入といった茶道具に限る。

伊部手の塗土には、備前市畠田（伊部の南西約5km）の土を使用したと伝わる。黄色の細かい土で、長船の刀鍛冶はその土を焼刃に利用した。なお、同様の発色が得られる土は畠田以外でも確認されており、おそらく当時の陶工は、畠田の土に限らず、身近にあるそうした土も利用していた。現在は、溝や田んぼに沈殿する「ソブ」と呼ばれる赤泥を塗り、伊部手を作る作家もいる。

一 これまでの見解と本稿の目的

伊部手の作品で、室町時代の年銘を刻む事例が複数知られる。そのため、伊部手は室町時代に出現するとされていた（桂一九七三）。また、塗土を施した茶道具には「作行にどこか古格が感じられる」事例があるとし、伊部手の生産は室町時代後期から続くともいわれ

てきた（林屋一九七六）。

ところが近年の研究では、根拠となる紀年銘作品の制作は江戸時代以降と考えられるようになり、多くの伊部手茶道具の生産は一七世紀中頃以降とされる（下村二〇一六）。「伊部焼」の表記が文献に登場するのも寛永年間（一六二四～一六四四）の後半であり、その頃に伊部手の生産は盛んになる。

しかし、慶長年間（一五九六～一六一五）に制作した可能性が高い甕に、伊部手のように表面が光沢のある黒色や紫色になり、付着した燃料の灰（ゴマ）が黄色に発色したものがある。初期伊部手には含まないとされる甕であっても、同じ発色であれば、伊部手と同じ素材を使い、同じ方法で焼成した可能性が高い。その甕の制作年代が分かれば、いつ頃から伊部手の出現が可能か推測できる。

本稿ではまず、一六世紀後半から一七世紀前半の年銘を記した甕を年代順に並べ、甕の変遷を紹介する。そして、伊部手と同じ発色の甕が、その中でどれくらいの時期に位置付けられるか検討する。

また、伊部手には、高取焼（福岡県）や美濃焼（岐阜県）の茶道具と形が似たものがある。高取焼と美濃焼は、文献と遺跡の調査成果から、茶道具の制作時期が絞り込める。その年代観を参考にして、伊部手の出現がいつ頃まで遡ることが可能か検証する。



慶長12年 1607

文禄3年 1594

元亀2年 1571

高さ 104.5cm
 口径 66.0 (67.5) × 58.0 (58.5) cm
 胴径 79.7cm
 底径 41.5cm
 重さ 126.0kg

高さ 106.5cm
 口径 60.5 (73.5) × 57.5 (60.5) cm
 胴径 80.4cm
 底径 38.5cm
 重さ 99.0kg

高さ 104.5cm
 口径 61.5 (64.5) cm
 胴径 83.9cm
 底径 42.0cm
 重さ 85.0kg

写真6 備前焼 甕の変遷①

二年銘の入った甕と「伊部手」の甕

ここで紹介する年銘の入った五つの甕は、いずれも岡山県立博物館の所蔵品である。年銘を刻む作品は稀少である上に、備前焼の制作年代を知る上で基準となる。また刻まれた年に起こったできごとやその頃に活躍した人物を調べ、どのような時代に使われていたか具体的に知ることも可能である。今回紹介するのは、戦国時代から江戸時代前期という、備前焼愛好家がとくに注目する時代に制作された作品である。そのため残念ながら、後世にこの頃の年銘を刻んだ例も少なからず存在する。

しかし備前焼の甕は、発掘調査成果に基づく分析が進み、形に加えて調整痕、そして表面の質感や色の変遷が研究者間で共有されてきた。本稿で対象とする作品は、これまでの研究成果と照らし合わせて、刻まれた年銘にいずれも違和感はない。

(i) 甕の変遷

今回紹介する中で最も古い年銘は、元亀二年(一五七二)である。毛利元就(一四九七〜一五七二)が死去し、織田信長(一五三四〜一五八二)が比叡山延暦寺を焼き討ちした年にあたる。この年銘を刻んだ甕は胴が大きく張る。外面は板状工具でならされ、表面に胎土中の砂粒を引きずった筋状の痕を無数に残す。内面の胴部最大径付近には、丸い工具痕が規則正しく並ぶ。タタキにより厚みが均一化され、表面も滑らかである。

次に古い年銘は、文禄三年(一五九四)である。豊臣秀吉(一五三七



元和5年 1619

高さ 97.8cm
口径 53.5 (56.5) cm
胴径 64.6cm
底径 30.0cm
重さ 66.0kg



慶長18年 1613

高さ 103.0cm
口径 68.0 (71.0) cm
胴径 79.0cm
底径 44.0cm
重さ 92.0kg



表面伊部手

高さ 104.0cm
口径 73.5 (77.0) × 69.5 (70.3) cm
胴径 84.2cm
底径 37.5cm
重さ 102.7kg

写真7 備前焼 甕の変遷②

（一五九八）が伏見城に入城した年にあたる。胴部外面には布状のもので撫でた痕があり、その痕は手の届く範囲で細かく向きを変える。内面には先に紹介した甕と同様の工具痕があるが、表面の滑らかさはやや劣る。そのためか、重量も重い。口縁端部には厚みがある。一六世紀後半から一七世紀前半にかけて甕の口縁部は厚みを増し、上方へ立ち上がる傾向にある。この傾向については、これまでも多くの研究者により指摘されてきた。

慶長一二年（一六〇七）銘を刻む甕の胴部外面にも、細かく向きを変えながら撫でた痕がある。また、表面に土が垂れたような痕があり、おそらく塗土も行われている。内面は工具痕が目立たず、起伏が顕著になり、厚みも増す。重量も増えるが、底部付近に石膏による補修があるため、正確な数値ではない。口縁部上端は厚みを増し、内側に丸く突出する。胴部は最大径の位置が頸部に近づいて高くなり、張りも少なくなる。この年に徳川家康（一五四三～一六一六）が駿府城を築き、江戸から移る。

慶長一八年（一六一三）、伊達政宗（一五六七～一六三六）が支倉常長（一五七一～一六二二）をヨーロッパに派遣する。この年銘がある甕は、胴部に横方向のナデ痕を残す。ナデ痕はほぼ水平方向へ、ひとつながりに周回する。これまでの細かく向きを変えるナデ痕とは異なる。表面は赤みが強い褐色の部分が多いが、はつきりと塗土の痕が確認できる。内面には起伏があり、工具で叩き締めた痕は薄く残る程度である。胴部の張りは小さくなり、最大径の位置も高くなるため、胴というよりは肩が張ったような形状になる。

最後の元和五年（一六一九）には、胴の張りはほとんどなくなり寸胴に近づく。これより新しくなると、頸部のくびれもなくなる。胴部外面には横方向のナデ痕が周回し、塗土を施す。内面の広い範囲に円形の工具痕を残すが、その間隔は均一ではなく、表面にかなりの起伏を残す。口縁部はさらに厚みを増して立ち上がり、端部を内側に巻き込む形になる。大きさは他よりも一回り以上小さく感じる。この年、伏見城の放棄が決定する。

(.ii) 「伊部手」との比較

写真1—1の甕は、表面全体が光沢を帯びた黒色になり、口縁部から胴部上半に掛かったゴマは黄色になる。その色調は伊部手の茶道具と共通する。底径に対して胴部最大径が大きいため、胴が張るようにも見えるが、頸部から見るとその張りは大きくなく、最大径の位置も頸部に近い。外面には塗土を施し、胴部には横方向に周回するナデ痕を残す。口縁部には厚みがあり、端部は丸く肥圧する。先に紹介した甕の中で特徴が最も近いのは、慶長一八年銘である。おそらく、その前後に作られた。そして、胴部外面のナデ痕から慶長一二年までは遡らず、胴部の形状から元和五年までは降らないといえる。また、元和五年銘とは形態差が大きいため、慶長一八年より降るとしても、それに近い年代と考えて問題ないだろう。

以上より、伊部手と同じ発色は、慶長年間末から元和年間（一六一五—一六二四）初頭頃、西暦で示すと一六一〇年代には出現していた。

三 懐石道具・茶道具から

『陶器考附録』（田内米三郎著、一八五五）の備前焼について記した項に、「高取ニ見違タルナリ」「高取トヨク似タリ」と記載がある。これは色の類似を指摘した記述ではあるが、実際、伊部手の中には高取焼と形がよく似たものがある。

三条せと物や町跡（京都市中京区）の小白山町で、高取焼の木葉形鉢が見つかっており、これとよく似た伊部手の鉢が複数伝わる。写真5はその一例である。高取焼の木葉形鉢は内ヶ磯窯（福岡県直方市）で焼成したとされる。内ヶ磯窯の開窯は慶長一九年（一六一四）であり、前章で伊部手と同じ発色の甕が制作されたと想定した年代と重なる。

また、伊部手には特徴的な耳が付く茶道具が複数知られる。写真4はその一例だが、この形状の耳は美濃伊賀にも見られる（写真3・4左下）。元屋敷窯（岐阜県土岐市）では、慶長一七年（一六一二）銘を底に刻んだ美濃伊賀の水指が確認されている（加藤二〇〇七、下村二〇二〇）。

内ヶ磯窯の操業は寛永七年（一六三〇）の前年までとされ（尾崎二〇一三）、美濃伊賀の生産は一七世紀中頃まで続いたと推測されている（下村二〇二〇）。そのため、高取焼の木葉形鉢や写真3の美濃伊賀花入の制作時期は、寛永年間まで降る可能性と同時に、慶長年間末頃まで遡る可能性もある。それらと特徴が共通する写真4・5のような伊部手は、慶長年間末頃から寛永年間、一六一四年頃から一六四四年の間に制作された可能性が高い。

おわりに

甕の変遷を提示した後、伊部手と発色が共通する甕を照らし合
わせたところ、慶長年間末から元和年間初頭頃、西暦で示すと
一六一〇年代に制作された可能性が高いと分かった。伊部手の発色
は、その頃には出現していた。

また、伊部手の懷石道具・茶道具と形や特徴が共通する高取焼
と美濃焼がある。これらの制作時期は慶長年間末頃から寛永年間、
一六一四年頃から一六四四年の間である。遅くともその期間内に、
伊部手の制作は始まる。



写真8 備前焼 水指
岡山シティミュージアム蔵(木村コレクション)

以上より、伊部手の出現時期は、最も古く考えると慶長年間末頃

に位置付けられる。ただし茶会記などの文献に登場するのは、寛永
年間以降である。伊部手は桃山時代の茶道具と比べて、明らかに厚
みが薄い例が多い。ロクロ成形後に変形を加える場合も押さえるだ
けで、桃山時代のようにケズリを加えて面を取ったりはせず、ヘラ
目も押さえ込まずに鋭い線を走らせる(写真8)。薄く金属的な質
感になるこれらの作品群は、桃山時代に作られたとは考えがたい。
伊部手の表面は光沢のある黒色や紫色になり、非常に特徴的であ
る。「土味が魅力」といわれる桃山時代の茶道具とは異質である(写



写真9 備前焼 細口徳利 岡山県立博物館蔵



写真10 備前焼 水指
岡山シティミュージアム蔵(木村コレクション)

真9)。その違いから、大きな時代の変化を感じる。しかし、伊部手の茶道具の中にも厚みがあり、桃山時代と通じるケズリ成形を加えたり、押さえ込んだヘラ目を入れたりした作品群がある。それらは、他の多くの伊部手よりも古い可能性が高い。

なお、伊部手には釜と似た形の水指がある(写真10)。伊賀や美濃伊賀にも釜と類似した形があり、格子文をタタキで表現する例もある。茶席での統一感や調和を求めたのか、用途や素材が異なりながらも、形その他、装飾が共通する茶道具は時代を問わず存在する。

ところで、調査の際、伊部手に見られる特徴的な耳の形は、釜に付ける鑲を表現したのではないかとの指摘を受けた。確かに正面から見ると二重か三重に巻いた鑲のようでもあり、釜から影響を受けて制作した形であれば、その可能性もある。

甕のように年銘を記した茶道具は極めて少ない。そのため制作時期を考える際には、特徴が共通する作品群を集めて粹組を作り、それぞれの作品から得られる情報を可能な限り収集し、粹組全体の年代を推測することになる。しかし、一定の年代観が得られた後には、粹組の中に差異が含まれていないか、そして設定した粹組が有効であるか、改めて見直す必要がある。

甕の年代観をそのまま茶道具にあてはめるわけにはいかない。最初に述べたとおり、甕は伊部手に含まないとされる。技法が確立してから、茶道具に取り入れるまで時間差があった可能性もある。しかし伊部手の発色そのものは、一六一〇年代には登場していた。

《主要参考文献》

- ・尾崎直人・福岡市美術館 『筑前高取焼の研究』福岡市美術館叢書五 福岡市文化芸術振興財団 二〇一三年
- ・桂又三郎 「古備前解説」『時代別古備前名品図録』光美術工芸 一九七三年
- ・加藤真司 「志野と織部の生産について」『志野と織部』出光美術館 二〇〇七年
- ・『三条せと物や町―桃山茶陶―』京都市文化財ブックス三〇 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 二〇一六年
- ・下村奈穂子 『備前焼茶道具の研究』法藏館 二〇一六年
- ・下村奈穂子 「十六・十七世紀の瀬戸・美濃窯の焼き締め茶陶」『此君』根津美術館紀要一一 根津美術館 二〇二〇年
- ・林屋晴三 「備前」『世界陶磁全集』四 桃山(一) 小学館 一九七六年